

昭和十年度東洋史研究文獻類目

水野清一、森 鹿三修
增村 宏、大島利一纂

四六倍判、一三三頁、定價九拾錢
東方文化學院京都研究所發行

言ふ迄もなく本書は一昨年東方文化學院京都研究所から出版された「昭和九年度東洋史研究文獻類目」の續篇である。此の前年度版に就いては已に本誌第一卷第一號に森鹿三氏の批評があり、且本誌の讀者諸賢の大部分は、日常使用して其の可否得失をよく御承知の事

と思ふから今回は前年度版との相違を逐次列挙して以て紹介の辭としたい。

最も著しい相違は體裁の修整である。即ち前年度版では日本、支那、歐米の三部に分ち、前二者は夫々同一基準の下に分類排列し、歐米の部は著者別索引となつてゐたのが、本書では日本と支那とを分割せずに兩者を混合して分類排列し、歐米の部も日本・支那の部と同様十九門に分類し批評紹介をも採録し文字通りの類目となつた。日本の論文と支那の論文とを同一基準で分類するからには、前年度版の様な窮屈な形式にするよりも、斯様に合一して了つた方が一段と合理的であると云へる。又子目の立て方にも多少の修正がある。例へば一般史の内、前年度版の「諸國關係史」がなくなり、別に「史籍」なる項が出来、歴史地理の内二「古地理」三「古藉地理考釋」が二「古藉」・三「古地理」と改められ、法制史が「法律」・「制度」の二項に分たれた如き類である。なほ歐米の部は十九門の分け方は日本・支那の部と同じであるが、細かな分類は施さず夫々地域に依つて排列されてゐる。

次には收録された雜誌・論集の數が著しく増加した

事である。日本の部では論叢や廢刊した雜誌八種を減じたが新に十四種を増し、支那の部は八種減じて二十種増し、歐米の部は一種減じて十三種増加した。日本支那の部は實際に必要な雜誌は殆ど洩れなく揃つて居り、歐米の部もこれだけあれば充分である。だが愈を言へば日本の部で「善隣協會調査月報」・支那の部で天津益世報副刊「史學」・大公報副刊「史地周刊」等を採録してほしかつた。

第三には前年度版には單行文献が收録されてあつたが本書には收められず、従つて日本・支那の部の批評紹介が前年度版では夫々の文献の題目の次に並記されてあつたのが附録として一括されてある事である。單行文献が收められなかつた事は物足りない様であるが實は此の批評紹介の目録が、同時に單行文献の一通りの目録ともなり得て些かも不便でない。

其の他では史學會、史學研究會、東洋文庫等に於ける講演概要も採録されてある。

以上が本書と前年度版との相違の重なるものである。扱本書の分類はよく出来てゐて脱落や過誤が非常に

少いのであるが多少目についたものもある。二三次に

述べよう。社會史の内に「部落團體」なる項があり乍ら「吾都里族の部落構成」が一般史の「各國史」に收められてあり、「商朝の氏族社會」が一般史の「通史・時代史」に收められてあり乍ら若干の類似の論文が社會史の「通記」に入れられてある。又小野勝年氏「近刊索引書一覽」(本誌創刊號)が收められてあり乍ら之と全く同種の「最近支那學關係索引目錄」(史觀第八冊)が見當らなう。それから言語文字學所收の“O Zna teni widow gwagola slawjansvich jazikov”や“Reflexion sur le Developpement d'Aspect du Vc rbe Slave”が採録されてゐるのは無意味であらう。歐米の部では“Eöjner & Chen “Alternating Lake” (ヘディン記念論叢所收)が見當らず、Maes, Un ami de Stendhal; Victor Jacquemont に對する Bacot の書評が採録され乍ら、Mergerie の Victor Jacquemont なる論文が收められて居なう。

最後に一言希望を述べたい。日本・支那の部二千五百餘篇、歐米の部書評共一千三百餘篇の論文が本書に收められてゐるが、之に對して十九門、更に日本・支那の部に於て總計九十二項目を設定した本書の分類方法は

煩瑣に過ぎると思ふ。尤も本書は論文が集つてから分類したのでなく、豫め項目を設定しておいて次々に論文を採録したのであらうから、多少の無理が生ずるのは已むを得ないが、まだく修正の餘地があらうと思ふ。例へば第十七門の内「叢書」、第十八門の「辭典・類書」の如きは前年度版の如く單行文献を採録して始めて意味があるもので、本書に於ては宜しく解消すべきものである。現に第十八門の如きは日本・支那の部で六篇、歐米の部で二篇の紹介が收められたにすぎぬ。第十六・十七・十八門は今少しく手際よく整理出来るであらう。又第六門の「政治史」も非常に狹義の政治史となつてゐるから、之も解消して一般史と學術思想史の中に入れられないであらうか。又體裁を四六判の小型にした方が便利ではなからうか。次年度版に於ける修整を切望する。ともあれ此の企圖が今日同種の諸目錄の最高峰たる事は定評ある所である。本書の如く日本支那歐米を打つて一丸とし、而もよく整つた東洋學の文獻目錄を作り得る機關は、今日同研究所以外にいくらでもあるといふわけではない。今後一層此の企劃を擴大充實の上年々續刊されん事を望む次第で

ある。

(藤枝 晃)

附記 本書巻頭「收録雜誌論集目」の支那の部に「學風」四卷一十二期(二十五年)五卷合訂本安徽省立圖書館刊が脱落してゐます、編者からの申出により一言附記しておきます。